

スリランカの儀礼劇ソカリ

——そのシンボリズムの考察——

渋谷利雄

目次

はじめに

I パッティニ信仰とソカリ

1. パッティニ信仰
2. ソカリの一般的特徴

II 調査地の概要

III ガラウダのソカリ一座

IV 演舞場へ

1. バーラウィーマ（聖務拝受）
2. ソカリ芝居
3. デーワ・ダーネ（神々への食物献納）
4. ソカリ芝居の構成

V 悪霊祓いとしてのソカリ

VI 豊穡祈願としてのソカリ

むすび

はじめに

近年スリランカにおいても、集約的な実地調査に基づいた人類学的儀礼・祝祭研究が蓄積をみるようになった。たとえば、仏教¹⁾、国家儀礼²⁾、治療儀礼³⁾などに関する研究がそれである。パッティニ（Pattini）信仰に関して

も、最近G・オバーセーカラによって、30年間にわたる実地調査および文献研究の成果が公開された⁴⁾。そこでは、フロイト理論に基づく精神分析が駆使され、パッティニ女神の西アジア起源説をはじめとして、意欲的・刺激的な仮説がいくつも提示されている。これにより、パッティニ信仰に関する研究は、飛躍的に高められたとすることができる。

しかし、彼が実地調査を通して直接対象にしたのはスリランカ西南部（低地地方）のパッティニ儀礼であり、高地のそれは儀礼的伝統が異なるとして初めから除外されている。同じパッティニ儀礼群に列せられ、高地および北部のワニヤ（Vanniya）地方の村々で演じられてきたソカリ（sokari）芝居は取上げられていない。ソカリがオバーセーカラの分析モデルに適合していないのかどうかは知らぬが、スリランカのパッティニ信仰を論じる以上片手落ちとすべきである。

ソカリは、南インドからスリランカに伝えられたパッティニ女神の信仰にちなんだ儀礼劇である。パッティニ女神は、シンハラ社会、タミル社会で広く受け入れられ、雨乞いや病氣予防・治療に効験があるとして信仰されてきた。ソカリは、内陸部の旧キャンディ（Kandy）王国⁵⁾領内に限定されて演じられてきたとはいえ、パッティニ儀礼のなかでも最も広く行なわれてきたものの1つである。ソカリは、兜率天（Tusitaya）から人間界に下生したパッティニの化身をさすとともに、儀礼として演じられる芝居そのものの名称でもある。芝居では、ソカリ・アンマ（Sokari Amma）のインドからスリランカへの来訪をコミカルに描いている。ソカリに関する入念な人類学的研究はまだないとはいえ、その予備知識は次の文献から得ることができる。

“The Folk Drama of Ceylon”においてE・サラッチャンドラは、劇作家・演出家の立場から芝居の役割や筋の記述に重点を置きながら、ソカリの起源や治療儀礼との関連などに言及している⁶⁾。M・D・ラーガワンは、敷物づくりのクラヤ（kulaya、カースト）、キンナラヤ（Kinnaraya）の村におけるソカリについて、簡単な民族誌的報告を行なっている⁷⁾。豊穰儀礼として若干シンボリズムに言及しているが、芝居の筋の記述がほとんどである。また、M・H・グナティラカによる小冊子“Sokari of Sri Lanka”では、白のシンボリズムと芝居の社会風刺的性格が指摘されている⁸⁾。なおワニヤ地方のソカリについては、J・B・ディサーナーヤカによる報告があり、楽器や役柄など高地のソカリとの相違を指摘している⁹⁾。

しかしながら、これらはいずれもソカリに関する断片的な記述や考察にすぎず、その全体像は明らかにされていない。筆者は、現在のソカリの実態を

綿密なデータに基づいて把握するために、ソカリが演じられている村に住み込み、会衆として儀礼劇に参加しながら、その見聞の記述を試みた。実地調査は、1981年3月から82年9月にかけて、高地のバドゥッラ県（Badulu Distrik-kaya）、ウィヤルワ郡（Viyaluva Kōrala）の村々で行なった。ここではガラウダ（Galauḍa）地区タラクンブラ（Talākumbura）村の事例を中心として、ソカリをめぐる儀礼の過程、芝居の構成を把握し、そのシンボリズムを考察することを課題とする。それにより、ソカリの儀礼としてもつテーマー悪霊祓いと豊穰祈願一を成就させるうえで、異人¹⁰⁾が重要な役割をもつことが明らかになる。

1. パッティニ信仰とソカリ

1. パッティニ信仰

テラワダ仏教教典や宗教エリートとしての僧侶による説明では、周知のとおり来世での救済と解脱が説かれる。しかし、民衆的・実践的宗教としてのシンハラ仏教においては、現世的性格が強く、仏陀はむしろ超越神として位置づけられている。民衆にとって仏陀は、ニルワナ（nirvāna）にあって限りなく偉大な存在である。すべてを超越しているがゆえに、現世と来世をあまねく支配する¹¹⁾。神々（deviyo）、星神（grahayo）、悪霊（yakā, yakṣa）、死霊（prēta）など、あらゆる超自然的存在が仏陀によって統轄される。

パッティニ女神は徳が高く¹²⁾、シンハラ人の神体系において、仏教と国家に対する四守護神の1人に位置づけられている。シンハラ社会におけるパッティニ信仰は、数多くのパッティニ神話群に基づいているが、それらはパッティニに関するタルミ語の叙事詩および神話のシンハラ語訳や解釈と考えられる。オバーセーカラは、神話テキストの分析を通して、パッティニをヒンドゥー教的な女神とする従来の通説をくつがえし、仏教的・ジャイナ教的な女神であるとしている¹³⁾。

パッティニは、シンハラ語のパッティニ神話でも、仏教的に様々な解釈されている。たとえばパッティニは、菩薩として男性に生まれ変わり、いつの日か仏陀になるべき存在である¹⁴⁾。住んでいるのは弥勒（Maitreya）同様、兜率天である。あるいはアンドンギリ（Aṅdungiri）山で悟りを開くために修業している¹⁵⁾。また、バーンディヤ（Pāndya）王の果樹園を訪れた仏

表1 高地シンハラ社会における儀礼の分類¹⁰⁾

儀礼職能者 (執行者)	超自然的存在	儀	礼	職能者 (執行者) のクアラヤ	その他の参与 者のクアラヤ
①僧侶 (hāmoduruvō, sāhu, bhikṣu)	仏陀 (buddu hāmoduruvō)	布施 (dāna), 供物献納 (pūjā), 護呪経 文 (piri), 説教 (bana), 葬儀 (gedara) など	布施 (dāna), 供物献納 (pūjā), 護呪経 文 (piri), 説教 (bana), 葬儀 (gedara) など	なし	ベラワ (Beravā)
②祭司 (kapurāla)	神々 (deviyo)	神遊び (dev. yāṅgē sellam), 供物献納 (pūjā), 食物献納 (dēva dāna) など	神遊び (dev. yāṅgē sellam), 供物献納 (pūjā), 食物献納 (dēva dāna) など	ゴイガマ (Goyigama)	ベラワ, ヘーナ (Hēna), ロディー (Rodi)
③呪医 (kattāḍiva, mantara kāraya)	悪霊 (yaka) 死霊 (prēta)	トヴィル (tovil), ライム切り (dehi kāpima), 邪術 (hūniyam) など	トヴィル (tovil), ライム切り (dehi kāpima), 邪術 (hūniyam) など	なし	なし
④占星術師 (śāstra kāraya)	星神 (grahayo), 神々	占星術 (śāstra kiyanava)	占星術 (śāstra kiyanava)	なし	なし
⑤医者 (vedarāla)	悪霊, 死霊	呪文 (mantara)	呪文 (mantara)	ゴイガマ	なし
⑥へび医 (visa vedā)	悪霊, 死霊	呪文	呪文	ゴイガマ, ワフンブ ラ (Vāhumpura), アヒクンタカ (Ahikuntaka)	なし
⑦バリ・アドワ (bali ādurā)	星神	バリ (bali)	バリ (bali)	オリ (Oli)	ベラワ
⑧家長 (gedara svāmiyā)	神々	正月 (avurudā utsavaya)	正月 (avurudā utsavaya)	家族と同じ	なし
⑨長老 (nāḍāyo vāḍiḥiti aya)	神々	結婚式 (vivāha mangalaya), 成女式 (vāḍiviya pāmūnima) など	結婚式 (vivāha mangalaya), 成女式 (vāḍiviya pāmūnima) など	親族と同じ	ヘーナ, ワフンブ ラ

※クアラヤ ベラワ: 鼓手, ゴイガマ: 農耕民, ヘーナ: 洗濯人, ロディー: 物乞い, ワフンブ: 粗糲づくり,
アヒクンタカ: へび使い, オリ: バリ儀礼の踊り手

陀に捧げられたマンゴーの実が土に埋められ、芽が出て育ち、その木の実からパッティニが生まれたこと、パッティニが敬虔な優婆夷 (upāsika) であったことも語られている¹⁰⁾。

シンハラ民衆の間でパッティニは、貞淑で献身的な妻、処女のままの女性、産まず女、悪を容赦しない厳しい女神として知られている。パッティニはしばしば、7パッティニ (Sat Pattini) と呼ばれる。これは天から人間界に下った際に、7回生まれ変わったことにちなんでいる。7生の内容は多様に表現されているが、ウコン (kaha), コホンバ (kohomba)¹⁷⁾, 水 (jala), 花 (mal), マンゴー (aṁba), 火 (gini), 石 (gal) などがよく知られている。

パッティニ儀礼は、セッラン (sellam 遊び, 踊り, ゲーム) またはクリーダーワ (kriḍāva 遊戯, ゲーム, 競技) と呼ばれている。ソカリ以外の主なものとしては、アン・ケリヤ (an keliya シカの角引き), ポル・ケリヤ (pol keliya ココナツ投げ), リー・ケリヤ (li keliya 棒打ち), ガン・マドゥワ (gam maḍuva 神話劇) がある。ここでパッティニ儀礼をシンハラ社会の儀礼体系のなかで見れば、ゴイガマ出身のカブラーラが中心となって執行するものに分類できる (表1参照)。

パッティニ儀礼はいずれも、日照りや伝染病などの危機に際して、女神が兜率天から下生して人々を救ってくれるという考え方に基づいている。こうした思想は、東アジアから東南アジアにかけて広く見られる弥勒信仰を想起させる。浄土兜率天では、未来仏としての弥勒菩薩が天人のために説法している。弥勒は寿が4000歳 (人間の56億7000万年) 尽きた時、この世に下生して菴華樹の下で成仏し、人々を救うために説法する¹⁸⁾、とされている。シンハラ人の中でパッティニは、決して Maitreya とか Bhōdisatva (菩薩) と呼ばれることはないが、兜率天から下生することから、弥勒と類似した役割が期待されてきたと考えられる。こうした点から、シンハラ社会のパッティニ信仰に、仏教的なメシアニズムの性格を見ることができると言える。

2. ソカリの一般的特徴

ソカリは、ソカリ・セッラン (sokari sellam ソカリ遊び), ソカリ・クリーダーワ (sokari kriḍāva ソカリの遊戯) などと呼ばれ、またソカリ・ナタナワ (sokari naṭanava ソカリを踊る) と表現される。ソカリは、パッティニ女神が下生してスリランカをみに来る物語である。しかし、みると言っても並の人間の眼ではなく、神眼 (divās) である。それは人々を加護すると同時に、悪を容赦なく懲らしめる。神に対する無礼、誤りに対しても厳しい。

慈悲深いと同時に畏怖すべき存在である。そのうえソカリでは、パッチェニだけでなく、カタラガマ (Kataragama)²⁰⁾ など他の有力な神々も招来される。踊り手、主催者、会衆=共同体は、ソカリ開始とともに神々の眼光にさらされる。

芝居の筋や役柄は座の間に差異に富んでいるが、詩と踊り、滑稽なせりふと演技によって、ソカリ・アンマとその夫、従者、下男らの一行のインドからの来訪、土地と勅の獲得、赤ん坊の誕生を描いている点はほぼ共通している。

ソカリでは、笑いを介したパロディーの手法により、逆にパッチェニ女神の厳格なイメージを浮彫にさせている。もちろん、会衆にとってソカリは何よりも娯楽で、腹の底から笑えるものである。

ソカリの一座は、座長 (gurunnāse) を中心に10人ほどの男性で構成されている。通常、水田、焼畑の耕作を生業としている農民である。神遊びとしてのソカリは、表1で見ると、理想的にはカプラーラが座長を務めるべきであるが、実際にはカッターディヤヤ、踊り・芝居の好きな者が率いている場合もめずらしくない。ソカリの一座は特定のクラヤに限定されないし、複数のクラヤから構成されている場合もある。

それぞれの座で芝居の基本的な筋は一定しており、座長はソカリの詩を書きつけたノートを持っている。それは師匠から受継いだもの、出版されている詩集に付加したものなどである。詩に関しては若干の取捨選択や順序の相違はあるが、座の間で相違は比較的少ない。ほとんど四行詩 (sivpada) で綴られており、太鼓に合わせて座長の音頭で一行ずつ踊り手一同歌いながら踊る。せりふと演技は座長の好みで演出され、踊り手の判断である程度即興的に演じられる。楽器はダウレ (davule) という太鼓1つだけである。

主な役は、ソカリ・アンマ、グルハーミ (Guruhāmi ソカリ・アンマの夫)、カーリ・アンマ (Kāli Amma 従者)、パッチャミーラ (Paccamāra 下男、Paraya あるいは Rāmā と呼ばれる)、大工 (Vaūva)、ウエダマハッチェヤ (Vedamahatteya 医者・代官)、ソッターナ (Sottāna 助手) などである。グルハーミとパッチャミーラは、タミル語やタミル語訛のシンハラ語を用いる。女役のソカリ・アンマ、カーリ・アンマ以外は、ほとんどが道化である。仮面の使用は普通、パッチャミーラ、ウエダマハッチェヤ、ソッターナに限られる。

道具立てとしては、まず神の依代^{よりしろ}・祭壇としてのヤハナ (yahana) が庭の一角に用意される。白布を敷いた椅子に神の絵像、ココナツ油の灯明 (paha-

na)、賽銭 (paṇḍura)、花が置かれる。ヤハナの代わりにマル・バラ (malpāla)、花小屋の意) と呼ばれる祭壇を作る一座もある。聖水 (haṇḍun kiripan)²¹⁾、臼と杵、むしろ、箕、人形も用意される。

ソカリが演じられる時期は、シンハラ暦のエサラ (Āsala) 月からニキニ (Nikini) 月にかけてである。ちょうど乾季で、グレゴリー暦では7~9月にあたる。この時期はエサラ祭 (Āsala utsavaya) と呼ばれ、ペラヘラ (perahāra)、ピンカマ (pinkama) など全島的に様々な祭りが展開される²²⁾。ソカリもエサラ祭の一環として演じられる。初日の午後、バーラウィーマ (bāravīma) またはパンドゥル・パンドィーマ (paṇḍuru baṇḍīma) という聖務拝受の儀礼を行なう。座長をはじめとして踊り手一同が、供物を捧げて神々から芝居の許可と加護を得る。

ソカリは、一座が各家に呼ばれる形で演じられる。一室を楽屋に借りて衣裳をつける。踊り手以外が楽屋に入ることは禁じられており、特にソカリ・アンマ役が衣裳を着けるのをのぞき見ると、眼がつぶれると言われていた。演舞場となるのは通常庭先で、その他寺院の構内、校庭などでも演じられる。サラッチャンドラとラーガワンは脱穀場 (kamata) で演じられるとしているが、筆者の調査地域ではそのような例はみられなかった。

演舞場はサバヤ (sabaya) と呼ばれる。サバヤは物理的空間というよりも、会衆がいる状態をさす。したがって人が集まらなければサバヤは成立しない。芝居はヤハナの前で神に見せる形で演じられる。ヤハナと踊り手を囲んで人垣ができる。演舞場は神聖かつ清浄な場所である。履物はいっさい使用しない。芝居開始時や踊り手が神がかりになったあとでは、浄めのために聖水がふりまかれる。芝居は夜8時すぎから明け方まで続けられる。出演料などはないが、赤子の誕生の場面の後など、踊り手が会衆の間を回って心付けをもらう。主催者は、途中1回の茶と終了後に軽食 (パンまたはミルク・ライス)、ビートルをふるまう。

ソカリは、一旦開始されると7夜連続して演じなければならない。そのあとさらに1・2日おきに7回、計14回演じるべきだとされている。最終の芝居の翌日には、デーワ・ダーネ (dēva dāne 神々への食物献納) が捧げられる。踊り手によって神々に供物が捧げられた後、会衆に分配され共食される。

以上のように演じられるソカリは、2つの主たるテーマを担っている。

(1) 悪霊祓い: sokarī nāṭuvot gamē leḍa rōga nāti venava. 「ソカリを踊ると村に病気がなくなる」

芝居に登場する道化たちは、反社会的・非道徳的言動を強調する。彼らは嘲笑され、悪霊として放逐される。悪霊は、病気など災厄の原因となるからである²³⁾。

(2)豊穰祈願: sokari nañanakota vahinava. 「ソカリを踊ると雨が降る」

芝居の奉納によって女神の怒りが鎮まり、雨がもたらされると考えられている。雨は健康と農作物の豊かな実りを約束する。芝居のなかに豊穰性を象徴する表現が多く見られる。

さらにソカリには、他の重要な特色が見られる。それは、正月、ウエサク (Vesak)、ポソン (Poson)、ピンカマ (pinkama) など祝祭²⁴⁾の行事の一部として演じられる形で、宗教的要素が少ないかわりに娯楽的要素の強いものである。神が座すヤハナは見られない²⁵⁾。

II. 調査地の概要

スリランカの多数民族シンハラ人の社会は、高地 (uḍa raṭa) と低地 (pa-hata raṭa) に区分される。低地はコロンボ (Kolarimba) からマータラ (Mā-tara) に至る沿海地域を指し、16世紀以降ポルトガル、オランダ、イギリスの支配を受け、早くから西欧文化との接触がみられた。また植民地経済の発展に伴って商業活動が活発になり、商業資本家を中心としたミドル・クラス (middle class) と呼ばれるエリート層が形成された。彼らは、19世紀後半に起った植民地支配に対する抵抗としての仏教ナショナリズムの担い手となった。

一方高地では、キャンディ王国が1815年まで独立を保持し、仏教と王権の共生関係が比較的長く続いた。王権崩壊後も人々はイギリス支配を容認せず、1817~18年にはウーワ (Ūva) 州を中心にして高地一帯に大反乱を展開した。今日でも反乱の指導者たちの偉業が語り伝えられている。その後高地にコーヒーや茶のプランテーションが発展すると、低地シンハラ人が商人、輸送業者として進出した。低地出身の大工や仏絵師も高地で活躍するようになった。

筆者の調査地ガラウダ・ワサマ (Galauḍa Vasama)²⁶⁾ は、高地のウーワ州パドゥッラ県ウィヤルワ郡に位置し、2大気候区分、乾燥地帯と湿潤地帯の中間にあたる。マハ (maha 北東モンスーンによる雨) は、年によってずれがあるとはいえだいたい9・10月から2月にかけてで、水田、焼畑とも耕作に十分な降雨がある。これに対しヤラ (yala 南西モンスーンによる雨)

図1 スリランカ概要図

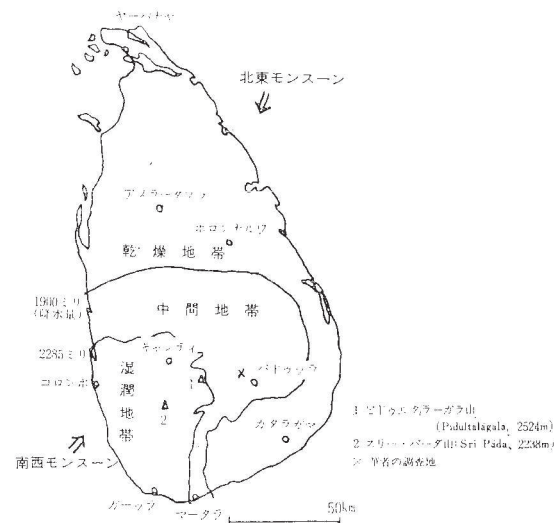
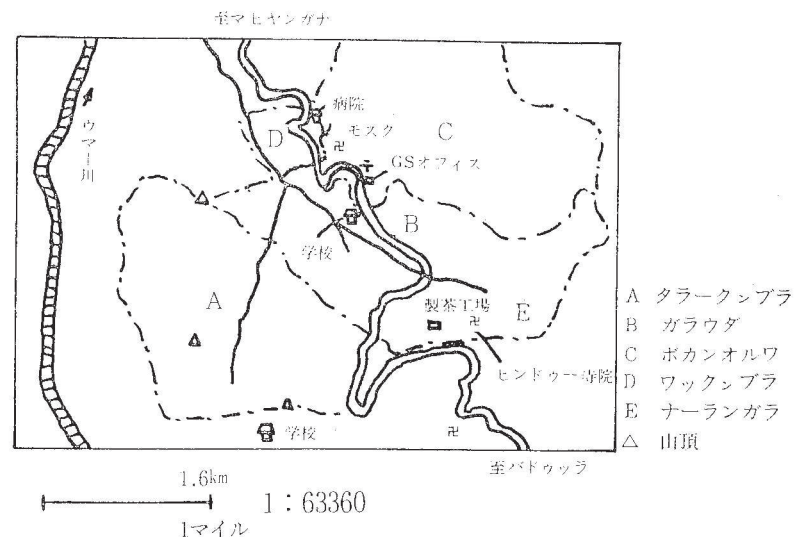


図2 ガラウダ・ワサマ



は不安定である。したがってこの地域の季節は、雨季 (9~2月) と乾季 (3~8月) に大別できる。

ガラウダ・ワサマは3043人 (1981年3月) の人口をもち、タラークンブラ、ガラウダ、ボカンオルワ (Bokanoruva)、ワックンブラ (Vakkumbura)、ナーランガラ (Nārangala) の5つの自然村から成る。これらの村は、海拔750~1500mの間に広がっている。

住民は、民族別ではシンハラ人 (仏教徒) が多数を占めるが、タミル人 (ヒンドゥー教徒) やムスリム (イスラーム教徒) も居住している²⁷⁾。シンハラ人の中では、職能・内婚集団クラヤによる分類も社会的に重要である。各村では普通1つのクラヤが多数を占め、少数の他のクラヤおよびタミル人、ムスリムから構成されている。この地域のクラヤは、ゴイガマ、ワフンブラ、カンマル (鍛冶職人)、ベラワー、オリー、ヘーナが見られる。クラヤ間の相対的上下関係も、だいたい以上の順である。クラヤおよび民族構成を村別にみると次のとおりである。

- A. タラークンブラ：ワフンブラ、カンマル、タミル
- B. ガラウダ：ゴイガマ、カンマル、ベラワー、オリー、ムスリム、タミル
- C. ボカンオルワ：ゴイガマ、ワフンブラ、ムスリム、タミル
- D. ワックンブラ：ムスリム、ゴイガマ
- E. ナーランガラ：ゴイガマ、タミル、ワフンブラ、ヘーナ

ちなみにタラークンブラ村では、総人口712人・110戸・130世帯のうち、カンマル3戸・4世帯・27人、タミル2戸・3世帯・14人、日本人1人 (筆者) を除いて、他はすべてワフンブラが占める (1981年5月現在)。

大多数の住民は農業に従事している。土地所有は私有が一般的で、耕地は水田 (kumbura)、焼畑 (hēna)、屋敷地 (gevatta) から成る。所有規模は零細で、タラークンブラ村では、水田所有世帯84の平均が0.18haにすぎない。畑地は所有世帯97の平均が0.67haであるが、国有地における焼畑の無許可耕作が大規模に行なわれている。

水田は谷沿いに棚状に作られており、水は沢からの灌漑と天水に依存している。米の2期作が行なわれているが、雨季にはすべての水田が耕作されるのに対し、乾季には沢の水を引ける一部の田に限られる。水田は清浄かつ神聖な場所と考えられている。特に脱穀場における作業はかつて男性に限られ、罌、魚、酒を断ち特別な言葉を用いるなど多くのタブーがあった。今日でも

廢物の使用や、かけ足、悪態は戒められている。

この地域の焼畑耕作は一定の区画内で行なわれており、以前のような集団での数年ごとに移動する形態はほとんど見られない。水田同様、耕耘、播種、収穫の際には、占星術に基づいた吉兆の日時 (nakata) が選ばれる。焼畑の作業は毎年7・8月に開始される。まず雑草や枝の伐採を行ない火をつける。やがてマハの最初の雨を待って、トウモロコシ、シコクビエなどの雑穀類、キュウリ、トマトなどの野菜類、インゲン、リーマ (līmā) などの豆類、サヅマイモなどの根菜類、タバコが栽培される。収穫期 (12~2月) が近づくと、象、猪の侵入や盗難を防ぐため、夜間見張小屋での監視が行なわれる。

屋敷地には、バナナ、パパイヤ、マンゴーなどの果樹、トウガラシ、コンショウなどの香辛料やコーヒーが栽培されている。その他檳榔子、パンの木、砂糖ヤシ²⁸⁾もよく見られる。また木材・燃料用樹木も植えられてある。

タミル人の大部分とシンハラ人の一部は、ナーランガラからボカンオルワに至るバス道の東側に展開する国営茶園の賃労働に従事している。また一部のシンハラ人は、タバコ乾燥所に雇用されている。バス道路沿いの商店の多くはムスリムの経営であるが、バス道からはずれた零細な店のほとんどはシンハラ人によって経営されている。

カンマル・クラヤに属する人々の多くは、今でも鍛冶屋を営んでいる。農具の製造・修理が主である。公務員は少数で、内訳は教員、郵便局員、バドゥッラの役所勤務、医師、グラマ・セーワカ (Grāma Sēvaka 村の行政官) などである。

Ⅲ. ガラウダのソカリ一座

ここで取上げるソカリ一座の座長は、ラトゥナーヤカ・ムディヤンセーラーゲ・プンチバンダー (Ratnāyaka Mudiyañsēlāgē Pūñchibandā), 39歳である。ボカンオルワ村出身、1965年に結婚し、以来ガラウダ村に住んでいる。水田と焼畑をそれぞれ0.4haずつ耕作している。そのかわり、付近の中小茶園の1つに日雇い労働に出ている。さらにポーヤ (pōya)²⁹⁾ には、寺院のデーワレ (dēvāle 神殿) にカプラーラとして務め、また人や家畜の病気の治療も行なっている。砂糖ヤシから酒 (rā) をつくる仕事も請け負っている。家族は妻と子供4人 (2男2女) で、茶園の日雇い労働をしている長男を除き、子供たちは学校に通っている。生活は貧しい方で、政府による生活補助としての食糧切符を受給している³⁰⁾。食事は昼と夜の2回、朝はお

茶のみで済ませている。家屋はカヤ葺き、2間のみである。

彼の父親は、4マイル北のゴードンナ (Gōdunna) 村出身という。やはりカプラーラで、僧侶からソカリを習い、ボカンゾルワ村で一座をつくった。父親が死んだ時、ブンチバンダーはまだ幼かった。彼がソカリを学んだのは、父親の弟子の一人からである。初めはその師匠の一座で踊っていたが、当地に移った後12年ほど前から座長として一座を率いている。なお彼の祖父は、南インドから移住してきた祭司であったという。

現在彼が率いる一座は、5年ほど前に組織されたが、必ずしも毎年演じてきたわけではない。踊り手はすべてガラウダ在住で、クラヤはゴイガマである。座の構成は次の通りである。職業については全員が田畑の耕作に携わっているもので、それ以外のものを記した。

(1)ソカリ・アンマ (パッチェニ女神の化身)

R・M・スドゥバンダー (Sudubandā) 24歳 茶園、ヤシ酒づくり

(2)グルハーミ (ソカリ・アンマの夫)

セナーナーヤカ・ムディヤンセーラーゲー・ティラカラトッナ (Sēnānāyaka Mudiyaṅsēlāgē Ṭilakarātna) 25歳 茶園

(3)パッチャミーラ (下男)

S・M・ティキリバンダー (Tikiriḅandā) 20歳 茶園、店番

(4)大工 (Vaḍuva)

ディサーナーヤカ・ムディヤンセーラーゲー・ブンチバンダー (Disānāyaka Mudiyaṅsēlāgē Puncibandā) 27歳 店主、タバコ乾燥所

(5)大工の弟子 (Koluva)

R・M・ウィマララトッナ (Vimalaratna) 24歳 茶園

(6)シンハラ兄 (Sinhala Aiyiā)

R・M・ブンチバンダー (座長) 39歳

(7)鍛冶屋の女房 (Nāccirē)

S・M・ムトゥバンダー (Mutubandā) 36歳 茶園

(8)ウエダマハッチャ (医者・代官)

(4)に同じ

(9)ソッターナ (助手)

(5)に同じ

(10)カプラーラ (祭司)

(7)に同じ

(1)産婆 (Vinnāmbu Amma)

(7)に同じ

(12)郵便配達人 (Piyumi)

(6)に同じ

(13)鼓手 (bera gahana ekkenā)

R・M・ウィジェーラトッナ (Vijēratna) 15歳 茶園

8人のうち、座長とS・M・ムトゥバンダー以外はみな独身である。鼓手のウィジェーラトッナは座長の長男、D・M・ブンチバンダーは座長の妻の弟、スドゥバンダーは座長の親族である。またムトゥバンダーとティラカラトッナは兄弟同志である。

仮面をつけるのはウエダマハッチャのみ。素材は檳榔子の葉柄 (pōpota) のつけ根で、楕円形に切取って目と口の部分に穴をあける。額の印 (tilakaya) と口髭を消し炭で、眉毛と鼻を水に溶かした小麦粉で描き、あご鬚には麻の繊維を垂らしている。

衣裳および化粧について見ると、グルハーミはムンダーサナヤ (mundāsana) という白のかぶりものを頭につけ、上は赤のランニング・シャツ、下は淡い黄のドーティ (dōti)³¹⁾を着ている。神の加護を得るため腕と額にウィブディ (vibudi)³²⁾を描き、額にティラカヤを印している。ソカリ・アンマは黒布で作ったかつらをつけ、赤のハッテ (hätte ブラウス) と白のサーリ (sāri) を着ている。頭には肩掛け (saluva) をかぶり、腕輪、首飾りをつける。パッチャミーラは、白のランニング・シャツにグレーのズボン、茶色の帽子をかぶっている。やはりウィブディとティラカヤを印している。大工は、グレーの背広に白のサロン (sarom 腰布) と帽子である。ウエダマハッチャは仮面をつけ、グレーの背広または黒のコート、破れたサロンという格好である。腹と腰には枕を入れてふくらませている。カプラーラは赤い布を肩にかけている。赤はカタラガマ神の象徴である。グルハーミ、パッチャミーラ、大工、ウエダマハッチャは、杖を持っている。他の役には特に衣裳・化粧はなく、シャツとサロンの普段着である。踊り手たちは、演舞場では履物はいっさい使用しない。

座長の説明では、役としてはカーリ・アンマもいるべきであるが、省いているとのことである。なお彼らはシンハラ兄を役としてあげないが、筆者の判断で加えておく。シンハラ兄は登場人物たちと問答を行ない、芝居を進行させるうえで重要な役割をもっている。座長は時々、鼓手も交代する。左手首に真鍮の腕輪 (geji valalu) 2つをはめているので、太鼓をたたく時に金属音が出る。

IV. 演舞場へ

バーラウィーマ (聖務拝受) は、座長や踊り手たちが多忙のため、1981年には省略された。ソカリ芝居は8月19日から25日まで7夜演じて打切られたが、内訳は、ガラウダ6回とタラクンブラ1回である。これに対し、前年の1980年には8月26日に開始され、ガラウダ12回、ポカンオルワ4回、タラクンブラ4回、ナーランガラ3回、ワックングラ2回の計25回演じられた。連続7回演じられたあとの「7回」は、7回以上という意味で、多ければ多いほどよい。女神による共同体の聖化、浄化が増幅されるだけでなく、踊り手たちが心付けを山分けできるからである。

1981年にソカリ芝居が早目に打切られた主な理由は、踊り手たちの多くが茶園の労働に携わっていることである。夜明け近くまでソカリを踊ると、翌日は仕事に出られないことが多く、その分だけ賃金が少なくなるからである。デーワ・ダーネ (神々への食物献納) は、踊り終えた翌日に捧げるべきであるとされているが、同様の理由から茶園が休みになる4日後の29日土曜日に行なわれた。

1. バーラウィーマ (聖務拝受)

省略されたバーラウィーマは、座長の説明によると次のように行なわれる。

踊り手一同沐浴した後、神の依代である乳の木 (kiri gaha) の前に、ココナツ、マンゴーとコホソバの葉、線香 (haṅdunkūl), 樟脳 (kapuru), 灯明、賽銭をそれぞれ7つずつ用意し、聖煙 (kaṭṭakumancal) で浄めて供える。仮面や衣裳を添えココナツを手を持って、芝居の許可と加護を神々に祈願する。この時、芝居の最初の詩「神々に告げ許しを賜わる」(deviyanṭa danvā avasava gānīma) をうたう。一同は正しく奉納することを誓い、同時に肉、魚、卵、アル・ケセル (alu kesel 料理用バナナ)、冬瓜 (alu puhul)、酒を断つタブーが生じる。これにより、聖務としてのソカリを演じるための特別なちから (balaya) が授かると考えられている。

2. ソカリ芝居

彼らは、上述のタブーについては守るべきだとしながらも全く無視している。踊り手のなかにはヤシ酒を飲んでから来る者が少なくないし、気のきく

主催者は踊り手にふるまうという。

ここで、8月22日にタラクンブラ村で演じられたソカリ芝居を紹介する。主催者は、ラージャパクシャ・デーワーゲー・アンディ・ラージャパクシャ (Rājapakṣa Dēvāgē Anḍi Rājapakṣa) 46歳で、隣村ウデーニー (Udēni) の学校 (1～5年次) に校長として勤務しながら、畑地3.2haと水田0.3haを耕作している。家族は、妻と子供6人 (20歳を頭に5男1女) である。クラヤはこの村の大半を占めるワフンブラで、3つのサブ・クラヤの最上位に属する。彼の家は瓦葺きで比較的大きく、村では最も裕福な部類に入る。

さて陽も沈み、ラージャパクシャの家では、一座の楽屋用にすでに一室が用意されてある。夕食を済ませた頃、ソカリのうわさを聞いた人々が集まり始める。8時少し前に一座が到着、早速衣裳を着け始める。のぞき見する子供たちが何度も注意を受けた。演舞場となる庭に立った座長は、神々から芝居の許可と加護を得るために祈る。彼自身マグル・ベラ (maguru bera)³³⁾を打ち、神ターパッティニ、カタラガマ、サマン、ヴィシュヌ、地母神、太陽神、月神一を招来する。その間、ヤハナ、聖水、ランプが用意される。椅子に白布を掛けたヤハナには、カタラガマ神の絵像³⁴⁾、灯明、賽銭7組、ピンクのブーゲンビリヤの花数個、詩のノートが置かれた。座長はヤハナを押し

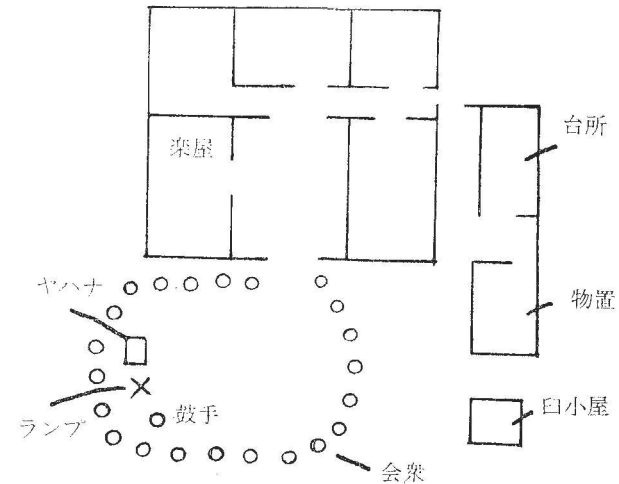


図3 演舞場 (sabaya)
(1981年8月22日、ラージャパクシャ宅)

た後、パッチャミーラを呼ぶ太鼓を打つ（以下、場面ごとに記述）。

A. 楽屋からとび出して来たパッチャミーラは、杖を持ち顔を左右に振りながら右回りに3周する。会衆は思わず後ずさりし、丸い空間ができる。シンハラ兄とのやりとりで、パッチャミーラがタミル人であることが判明する。彼は、他にソカリ・アンマやグルハーミ、多勢の兵隊がいると告げ、一行を連れて再登場する。シンハラ兄の問いに、グルハーミはディッリ（Dilli）国、ソカリ・アンマはカーシ（Kāsi）国、パッチャミーラはベンガール（Bengāle）国出身と答える³⁵⁾。彼らがランカー島に行く目的は、シンハラ人に踊りを見せるためと説明する。

B. 一行は海に出会い船が必要となる。

(1) ちょうどコーッテ（Kōtte）³⁶⁾から来た大工と弟子が、仕事を探して旅していた。シンハラ兄が仲に入って交渉するが、言葉がうまく通じない。

(2) 大工は船作りの仕事を請負ったが、肝心の大工道具は白蟻に喰われて台無しである。鍛冶屋を探して修理してもらわなければならない。そこへ郵便配達人が大工に偽電報を届ける。親族が、ズボン、コート、布地、サンダル、帽子、ダール豆、アラック（arakku 酒）³⁷⁾を持って来るようにとの由。郵便配達人は世話賃を要求するが、インチキがバレて追払われる。

シンハラ兄の道案内で鍛冶屋を訪ねると、すでに棟梁は死んでおり、その女房は悲しみのあまり家の中に籠っている。女房に頼み込んでフィゴを動かしてもらい、道具の修理を済ませる。

(3) 船の材料にする木材を手に入れるため、イシギリ（Isigiri）³⁸⁾の森を訪ねる。7回目にして丈夫なミララ（milala）³⁹⁾の木を探し当て、切倒す。丸太を作業台に乗せ、下げ振り糸をつけ、墨打ちをして板を切り出す準備をする。大工とパッチャミーラ、グルハーミの組み合わせは、2人が作業の仕方を知らず、言葉の誤解もあっていずれも失敗する。大工とソカリ・アンマが組むとうまくいく。パッチャミーラは嫉妬して大工を杖でなぐりつける。結局ノコギリが引かれ、パッチャミーラは女神の許可を得て7層の床をもつ船が完成する。

(4) 船を飾り荷を積み、占星術で選んだ吉兆の日時に乗込む。しかし、出帆の時に不吉な鳥コウラ（kovula インド・カコウ）が鳴き、占いでも難破とソカリの失踪が予知される。それでも一行は出発し、7海一大海、黙海、黒海、乳海、血海、塩海、青海一を渡る。難破しながらもランカー島にたどり着き、北西部のプッタラマ（Puttalama）に上陸する。彼らは、旅人の憩いの場所マダマ（maḍama）⁴⁰⁾へ向かう。

<休憩>

踊り手だけでなく、会衆の大人たちにも茶がふるまわれた。時刻は午後11時、会衆が最も多い時で、70人あまりに達していた。そのうち子供が半分を占める。座長は長時間の休憩を嫌う。会衆が帰ってしまうからだ。15分足らずで再開。

C. ランカー島に到着したとはいえ、彼らには居場所がない。シンハラ兄が、ウェダマハッチャに頼んで土地をもらうよう助言する。彼は医者で、その地方の代官でもある。

そこへせむして太鼓腹のウェダマハッチャが登場、豊かな腰を振って激しく踊る。シンハラ兄に、なぜ年寄がとびはねているのかと尋ねられると、「老いてもサルは地を行かず」（nākivunāta vaṇdura bima yanne nāhā）⁴¹⁾と鮮かに言っている。ウェダマハッチャ登場は、会衆が最も待望している場面の1つである。

(1) 少年2人が杵を持って立ち、関所に見立てられる。ウェダマハッチャに会うには関所を通らねばならず、それにはサーガルプラ（Sāgalpura）⁴²⁾王の署名入り証書が必要である。しかしグルハーミは、規則を無視して強引に突破しようとする。パッチャミーラは杖で番人をなぐりつける。結局何度もサーガルプラへ足を運び、7回目にしてやっと規定の証書を入手し、関所を通過する。

(2) 初めはパッチャミーラが、次にグルハーミがウェダマハッチャを訪ねるが、言葉がうまく通ぜず追い返される。ソカリ・アンマが行くと、ウェダマハッチャもソッターナも彼女の色気に魅せられてしまう。はるばるやって来て疲れているという彼女の言葉に、ウェダマハッチャは土地を測り与える。ソカリ・アンマの一行はマダマを建て、土間に浄めのゴマ（goma 牛糞）を塗る。

D. 遠路旅して来た彼らは、疲れ果て空腹である。

(1) 例の通りシンハラ兄が現われ、ウェダマハッチャから粃をもらうよう助言する。相変わらずウェダマハッチャの名前さえ正しく言えない2人をソカリ・アンマが咎めると、「お前はシンハラ人だが俺たちはタミル人だ」とグルハーミは居直る。パッチャミーラが訪ね、粃をもらう。粃を陽に干し、臼でつく。これは、むしろにあお向けになったパッチャミーラの腹に臼をのせ、ソカリ・アンマと座長がつく。座長はカーリ・アンマの代わりである。箕を振りながら、ソカリ・アンマが会衆から金銭を乞う。

(2)牛を率きつれた隊商がやって来る。常にソッターナ役が牛を演じる。商人の役は省かれている。グルハーミとパッチャミーラは、購入すべき食糧品をタミル語であげる。ウェダマハッテヤは商人から酒をくすね、ソカリ・アンマにこっそり飲ませる。グルハーミとパッチャミーラはそれに気づき、厳しく咎める。パッチャミーラは買出しに出されるが、酒を飲み途中で眠ってしまう。

E. ソカリ・アンマが妊娠する。出産が近づき、グルハーミは産婆を頼む。ソカリ・アンマをむしろで囲い、産屋に見立てる。しかし難産で産婆の手に負えない。ウェダマハッテヤが呼ばれ、ソカリ・アンマに油薬が与えられる。やがて赤ん坊の泣き声が聞こえる。吉兆の時間を選び、初めての乳ランキリ(rankiri)⁴³⁾を飲ませる。ウェダマハッテヤ、グルハーミ、パッチャミーラは、それぞれ赤ん坊が自分に似ていると主張して譲らない。

踊り手一同は、赤ん坊を抱えたソカリ・アンマを先頭に、会衆から贈物を乞う。1人1人に即興の詩で、金銭、腕時計、首飾り、腕輪、指輪などを乞う。会衆には気前の良さが期待されている。この時は主催者が5ルピー（約75円）、他の会衆は10セントから50セントを与えていた。金銭以外のものはあとで特主に返される。

〔この場面は、筋からするとD-(7)の次に来るべきであるが、この一座はD-(2)のあとに置いている。これについては後述。〕

(3)炊事用に水を汲んで来なければならない。ごねるパッチャミーラに代わって、グルハーミが出かける。水場はウェダマハッテヤ所有の井戸で、そこには象、熊、豹、コブラ、犬がいる。ソッターナ役が演じる犬が、グルハーミの足に噛みつく。グルハーミは倒れる。パッチャミーラは、グルハーミが死ねばソカリ・アンマを自分のものにできると喜ぶ。治療のために、ソカリ・アンマはウェダマハッテヤを呼びに行く。

(4)ウェダマハッテヤは薬の用意をする。材料は、クソ壺の汚物、小バエの油、鉄槌の若葉、卵の根、ニワトリの乳、むしろのジュースである。杖をあてて脈をみ、呪文を唱える。治療を終えて帰るウェダマハッテヤとソッターナのあとを、ソカリ・アンマがついて行く。これは、ウェダマハッテヤの呪力(diṣṭi)による。

(5)グルハーミは回復し、ソカリ・アンマのいないのに気付いて探し回る。彼はカタラガマへ行き、祈願する。パッチャミーラを称える詩を一同うたうなかで、ヤハナの前でカブラーラが神がかりとなる。この時ソッターナも神がかりとなって踊る。パッチャミーラが憑依したのである。太鼓の拍子が早くな

りカブラーラが激しく踊るようになると、演舞場の雰囲気が一変する。黙する会衆は、緊張した面持ちでカブラーラに注目する。座長はカブラーラと問答し、神のお告げ一約束通り供物を捧げるべきこと、主催者の長男を124日間家に留めおくこと、守らなければ3カ月間行方不明となること一が示される。カブラーラとソッターナは、ほぼ同時に意識を失い転倒する。

お告げは特別な言葉と口調で語られるので、会衆にはわかりにくい。不安気に尋ねる主催者とその家族に座長が説明する。一方他の踊り手たちは、失神した2人に聖水を飲ませて意識を回復させる。カブラーラは、神がかり中に語ったことは憶えてないという。

(6)むしろの材料にする葉を沼地に取りに行く。東にして持帰り、陽に干す。ソカリ・アンマと座長が、むしろを織る。蓮の花とオウムを織込む。むしろの上にはシヴァ神、下には地母神が、四角には四守護神が宿るといふ。このむしろはマダマに敷くためのものである。

(7)グルハーミ、ソカリ・アンマ、パッチャミーラに、ウェダマハッテヤとソッターナも加わって炊事の用意をする。ソカリ・アンマが料理する。みなあさましく、容器の底に残ったこげごはんまでも要求する。グルハーミは、ソカリ・アンマはシンハラ女だから、彼女の料理は俺たちの口に合わないと言文を言う。

F. 故郷へ帰る

(1)グルハーミとソカリ・アンマが大麻(kansā)を吸う。パッチャミーラがグルハーミを追払い、ソカリ・アンマと吸う。パッチャミーラは吸いすぎて倒れてしまう。グルハーミは彼をそのままにして、ソカリ・アンマと立去ろうとする。一同、「お前の父も来ている起きよ」とうたいかけるが、眼をさまさない。だが、「ソカリ・アンマが来ている」とうたったとたん、パッチャミーラは勢いよくとび起きる。

(2)途端に、ソカリ・アンマは1人になってしまう。座長の説明では、グルハーミはカタラガマ巡礼の際にジャングルで死亡、彼女がグルハーミを探しに行くと戻ると18歳の息子が病気で死んでいたのである。

間を入れず詩で、「終了」(avasānaya)、「聖務を解く」(āpa hārima)、「衣裳を解く」(āndun gālavima)を踊り手一同ヤハナに向かってうたい踊る。座長が、神々から加護を得るための祈りを口のなかで唱える。踊り手たちは合掌して座長にあいさつしたあと、座長とともに主催者にあいさつする。

芝居は午前3時すぎに終了した。すでに会衆の大半は去り、残ったのは10

人足らずであった。踊り手たちに茶、バナナ、パンがふるまわれた。午前4時、彼らは帰って行った。残った若者数人は、主催者の長男を囲んでカードで賭博(būru gahanava)を始めた。

3. デーフ・ダーネ(神々への食物献納)

デアフ・ダーネは、8月29日(土)の朝に始まった。場所は、座長の家から徒歩5分足らずのカマタ・ゲダラ(kamata gedara)である。カマタ・ゲダラは、「脱穀場の家」の意である。現在では水田のなかに浮かぶ小島のように見える荒蕪地であるが、かつてはパッチャミーラ役のティキリバンダーの家族が住み、庭を脱穀場にしていたという。座長によると、そこを選んだのは脱穀場のためではなく、神の依代となるジャク・フルーツ(kos)の木があるためである。

午前8時頃集合。踊り手を中心に男性のみで準備を行なう。子供たちも手伝う。カマドを設置し、銅製の火鉢でパニ・バトゥ(pāni bat 甘いごはん)をたく。材料は、ムンアタ(munāṭa)⁴⁴⁾、米、ココナツ・ミルク、ヤシ蜜(kiṭul pāni)である。

ココナツの果肉を小片に切る。できるだけたくさんの種類の果物が用意される。この時は、パイヤ、バナナ、パイナップル、オレンジ、パッション・フルーツ、サトウキビ、ペーラ(pēra)⁴⁵⁾、アボカド(aligata pēra)が用意された。

同時にトラナ(torana 祭壇、神棚)⁴⁶⁾を作る。棒で骨組を作り、バナナの幹、若いココナツの葉、花で飾る。トラナの上を白布でおおう。座長は、ライム(dehi)の枝でセンブワ(senbuva 真鍮の壺)の聖水をゆっくりかき回しながら、神々の加護を得るために祈る。聖柱カパ(kapa)⁴⁷⁾としてマンゴーの枝を用意する。

午前11時25分、準備完了。50mほど離れた水浴場(pihile)で踊り手たちが沐浴する。水浴場のそばにカパを立て、灯明、線香、樟脳を供え、聖煙をたく。この間太鼓が鳴りわたる。

正午、一同は水浴場からペラヘラ(perahāra 行列)でトラナへ向かう。カパを両手で持ったソカリ・アンマ役のストゥバンダーを先頭に、ほら貝を吹き、太鼓をたたき、詩「ソカリ生誕」(Sokari upata)をうたいながら進む。彼らはトラナの前で右回りに3周したあと、直ちにプージャー(pūjā 供物献納)を行なう。座長は、息で供物をけがさぬよう布で口をふさぐ。バナナの葉8枚を棚に置き、その上にパニ・バトゥ、ココナツの果肉、果物、

ビスケット、キャンディ、賽銭、樟脳、灯明、線香をそれぞれ聖煙で清め、供える。8組の供物は、踊り手8人が捧げる形をとっているからである。マグル・ペラを打ったあと、座長が長い祈り—神々の加護、あらゆる災厄の祓い、豊穡祈願、誤ちに対する許しなど—を唱える。このあと、バナナの葉で作った小さなカップで聖水(8つ)を供える。

午後12時35分、その場に集まっていた70人ほどの人々に、バナナの葉で供物の残りが配られる。供物を食べると病気になるいと言われている。踊り手たちもトラナから供物を少し取って食べる。会衆の8割以上が子供で、大人のうちのほとんどが年配の女性であった。

午後1時、全員が食べ終わると、まもなくソカリ芝居が始まる。省略が多く、ほとんど詩と踊りのみで演じられる。カプラーラが神がかりになって、毎年ソカリを奉納するよう告げる。一同はうたいながら衣裳をはずしてトラナの前に置く。

午後2時30分、芝居は終了する。踊り手たちは合掌して座長にあいさつする。次に一同年配の会衆にあいさつする。座長は踊り手1人1人に対して、呪文を唱えながら清めのためにライムの枝で聖水を塗る。さらに、踊り手たちと残っていた子供たちは聖水を飲む。

午後2時45分、踊り手たちはトラナの供物を持って帰る。トラナは放置され、自然に壊れるにまかせられる。座長の家で踊り手たちは供物を食べる。今回の門付けの総額は175,38ルピー(約2,630円)で、大部分をデアフ・ダーネに費したという。

4. ソカリ芝居の構成

ここで、ソカリにおける儀礼の過程と芝居の構成について整理しておく。V・ヘネップが示したように⁴⁸⁾、通過儀礼においては、分離、境界、統合の3局面がみられることがよく知られている。しかしこうした過程は、成人式、結婚式などに限られず、儀礼には一般にみられるものである。

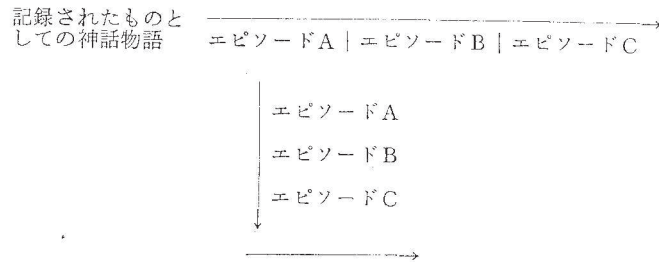
ソカリでは、入会者は踊り手たちであり会衆=共同体である。踊り手たちは、共同体の身代わりとして聖務を果たさなければならない。ソカリ全体としてみれば、踊り手たちが神々から許可と加護を得るペーラウィーマが、分離の局面である。彼らにはちからが授かり、タブーが生じる。ソカリ芝居は境界の局面にあたる。冒頭でパッチャミーラが3周して世界を創造する。会衆=共同体は、この聖なる空間に生起する出来事を見つめる。毎夜、非道徳的・反社会的演技と笑いがくり返され、気前の良さが強調される。統合の局

面はデーワ・ダーネで、踊り手たちは衣裳をはずし、浄めを受ける。タブーは解除され、特別なちからは消滅する。人々は日常の生産活動に励む。共同体は再生されたのである。

儀礼劇の構成を把握するうえで、折口信夫の能研究は示唆的である。折口は、日本の古いあらゆる芸能には副演出が伴っているとす。能は元来、「翁」、「三番叟」、「神能」……と演じられてきたが、「三番叟」以下の能はすべて「翁」に対する説明(もどき)の関係にある、と述べる⁴⁹⁾。

こうした見方は、レヴィ=ストロースの考え方を図示したE・リーチのモデルに基本的に共通する。神話では出来事が線条的に展開していく。それはエピソード(A, B, C, ……)に分解できる。エピソードの各々は、他のエピソードの部分的変換になっている。エピソードを重ね合わせに並べることにより、累積の結果が得られる。リーチはこれを、あらゆる言語による表現と儀礼的活動に共通すると一般化している⁵⁰⁾。

図4 物語の構造⁶¹⁾



以上のモデルを参考にしてソカリ芝居を観ると、ソカリ・アンマが次々と問題・課題に直面し、試練・困難を経て解決していくという筋立てになっていることに気付く。

ところで表2では、筆者の判断で場面に関して若干の入れ替えのあることを断っておかなければならない。8月22日の芝居では、EはD-(2)の次に挿入された。その時だけでなく、この一座はそうした入替を常としている。座長の説明によると、理由は会衆が多いうちに「赤ん坊を寝かしつける」(Eの最後の部分)ためである。それは芝居のなかで最もめでたく、会衆から金銭の贈与が期待できる最良の機会である。実際、午前0時頃になると会衆のほとんどは去り、主催者の家族だけになってしまうことが多い。この入替は、この一座にとって芝居を省略する方法でもある。会衆の少ない時には、Eを演じたところで打ち切ってしまう。7回の芝居のうち3回は、赤ん坊を寝かしつけて終了となった。

表2 ソカリ芝居の構成

問題・課題	試練・困難	結果
A. スリランカへ踊りを見せに行く	海を渡る	
B. 船を作る ①大工に依頼する ②道具を修理する ③木を切り船を作る ④航海	言葉の誤解 鍛冶屋の死 言葉、切り方を知らない 不吉な予言、難破	契約 修理 船 到着
C. 居場所を得る ①ウェダマハッチャに会う ②土地を得て休泊所を建てる	閑所 言葉の誤解	面会 土地、休泊所
D. 食を得る ①ウェダマハッチャから糲をもらう ②品物を持って来る ③水を汲んで来る ④ウェダマハッチャを呼んで治療 ⑤ソカリを探す ⑥むしろを織る ⑦料理し共食する	言葉の誤解 酒に酔う 犬に噛まれる ソカリが行方不明 祈願 調理法を知らない	糲 品物 回復 発見 和 和、性的関係
E. ソカリの出産	難産	赤ん坊
F. 故郷に帰る ①大麻を吸う ②ソカリひとりになる	パッチャミーラ倒れる	回復

本稿では、ソカリを物語の筋に沿って解釈するために、場面の構成を本来の順序に戻した。こうした入替や省略が普通に行なわれていること自体、エピソードの累積的構成を示している。それによってソカリの担っているテーマ「悪霊祓いと豊穰祈願」が失われることもなさそうである⁵²⁾。

V. 悪霊祓いとしてのソカリ

芝居の最初の場面でグルハーミは、なぜスリランカに行くのかというシンハラ兄(=会衆=共同体)の問いに、「踊り(nāṭum)を見せに行く」と答える。シンハラ民俗社会において踊りは、本来神々や悪霊を慰撫し、同時に会衆も楽しむものである。雨と豊作、出産、病氣治療・予防、復讐など、現

世利益を実現するために捧げられる。年中行事的に行なわれる儀礼・祭りでは、悪霊祓いと豊穰祈願が対になっていることが多い。豊穰が実現されるには災厄が祓われなければならない。また豊穰性自体が災厄を祓うちからである。

村人は、「ソカリを踊ると村から病気がなくなる」と言う。病気の原因は、自然的原因のほかに、神々の怒りや悪霊、死霊がとりついたことによると考えられてきた。パッティニ女神がスリランカをみる行為には、そうした危険を祓う意味が含まれている。パッティニの神眼には、けがれ⁵⁵⁾を放逐し、恵みをもたらすちからがあると考えられている。

satveni salambak aragena e.	nnē
māgē daruvan duk durale	nnē
Sat Pattini deviyo diṣṭi hela	nnē

7つ目の足輪を携えてお出になる
我が子供⁵⁴⁾らの苦しみを祓い浄める
7パッティニ神が神眼をなげかける

これまでの研究では⁵⁵⁾、いずれもソカリの豊穰儀礼的性格には若干ふれているが、悪霊祓いの面については議論していない。ここで悪霊祓いというのは、人間に災厄をもたらす原因すべての除去の意味である。

まずパーラウィーマ（聖務拝受）をみよう。踊り手たちは浄めのために沐浴する。乳の木はミルクのシンボリズムに関連する。ミルクはシンハラ文化において、吉兆、豊穰、清浄の象徴である。清浄とみなされているココナツ、マンゴーの葉、線香などが、供物として捧げられる。踊り手たちにこの時生じるタブーは、神が嫌う不浄なものを断つことである。これは彼らが身体を清浄に保つ方法であり、神から授かったちからの証である。清浄さはまた、不浄な悪霊や死霊をよせつけぬちからでもある。

ソカリ芝居では、言葉、鍛冶屋の死、不吉な予言、関所、病気、ソカリの失踪、難産、大麻の吸いすぎといった障害を克服していく。こうした構成自体、実に悪霊祓いの的である。

登場人物は異人だけである。ソカリ・アンマ、グルハーミ、パッチャミーラは、北インドからの来訪者である。グルハーミはアーンディ・グル（Āndi Guru）とも呼ばれ、それは南インド・アーンドラ地方出身の放浪の行者を意味する⁵⁶⁾。パッチャミーラは、パラヤ（Paraya）と蔑まれて呼ばれる。パラヤは、インドおよびスリランカのタミル社会で非常に低く位置づけられてい

るクラヤをさすだけでなく、外国人、浮浪者の意でもある。大工と鍛冶屋は、その職能から呪術性を帯びている。大工は低地出身である。ウェダマハッテヤは代官でヤブ医者、好色、踊り好きな爺さんである。ソッターナはとんまな助手である。カプラーラは、神と人間との仲介者である。

異人は共同体にとって聖でもありけがれでもある。時には共同体にとって危険な存在である。ここでけがれを顕在化させるうえで積極的な役割をもっているのは、グルハーミ、パッチャミーラ、ウェダマハッテヤといった道化である。グルハーミ（グルワ）の格好を見よう。

mudāpuvama hisa lēditi vāgi	rē
hināpuvama data gū māli iti	rē
mudāpuvama vata inikunu daṅga	rē
manāpuvama Guruvāṭa mē Soka	rī

髪をほどくと虱の卵がおちる
笑うと歯クソがこぼれおち
衣をとくと虱がわいてくる
グルワを好いたこのソカリ

gahala pataka jalaveti soṭu āṅda ā	ṅda
kasala goḍaka kunu āti āge kunu bā	ṅda
ahala gamaka innāṭa bāri kunu ga	ṅda
pahalavunayi Guruvāṭa Sokariya la	ṅda

芋の葉からおちる水のように鼻水をたらしすすりながら
腐ったゴミくずのように身をまとい
隣りの村でもいられない腐った臭で
グルワのもとに来たソカリ

大変なきたなさである。おまけに醜い老体で手足をゆすりながらやって来て、わめきながらブータ・ヤカー（bhūta yakā）のように踊る。ブータ・ヤカーとは死霊（餓鬼）で、生前の罪によって常に飢渴に苦しみさまようものである。まさに最低最悪の存在である。飢えて行くあてのないパッチャミーラを下男に雇ったのは、このグルハーミである。パッチャミーラも夜叉yakā）のようなやつと表現される。こうしたみすばらしい身なりやきたなさは、人格的価値を低下させる。

グルハーミとパッチャミーラは、シンハラ語をあまり解せない。しゃべるのはタミル語訛のシンハラ語である。

Sinhala Ayiya : umbala Demala da Sinhala da ?

シンハラ兄 : お前らはタミル人かシンハラ人か ?

Paccamira : yēka [ēka] kivva nam yēma [mehema], taṁbala [Demala].

パッチャミーラ : それを言うならこうさ、タンバラ。

mehema と言うべきを yēma, Demala を taṁbala と訛っている。こうした語法は随所に見られる。タミル語訛は、シンハラ兄、大工、ウエダマハッテヤを混乱させ、会衆の嘲笑を浴びる。言葉をよく解せない者や訛のある者は、馬鹿、間抜け、1人前でないという印象を与える。彼らの訛はいくら教えられても直らない。シンハラ兄はとうとう腹を立ててしまう。すると「まちがっているのはシンハラ人の方だ」と居直る。

彼らはシンハラ社会の慣習を知らない。あるいは無視する。たとえば、神を拝むのにグルハーミはばったり倒れる。パッチャミーラは尻を向ける。規則を無視して関所を強引に突破しようとする。ウエダマハッテヤを訪問する時、瓦屋根に石を投げる。

ウエダマハッテヤは、無礼な訪問者に悪態を浴びせる。たとえば、土地をもらいに来たパッチャミーラに対して、

dīpiya hinajjāti paraya ehenam yanava !

ぶんなぐれ、下衆野郎行っちゃえ !

と、罵倒する。そういうウエダマハッテヤも品行方正どころではない。ソカリ・アンマにちょっかいを出し、アラックを飲ませ、とうとう呪力で連れ去ってしまう。豊かな性関係は豊穰性を実現するちからであるが、日常生活の規範からすれば不倫の関係であり、反秩序的行為にほかならない。赤ん坊にランキリ（初めての乳）を飲ませる時にウエダマハッテヤが唱える呪文は、非道徳的、反社会的なもので充ちている。

pāre ripan, bānum ahapan, ēdanḍu pālam kaḍāpan, mankolla kāpan,
道でクソしろ（笑い）、悪態たれる、水路や橋をぶっこわせ、強盗やれ（笑

harak kapāpan, būruva gahāpan, man vāge hāndāvenakoṭa tuna hamārak
い、牛を殺せ（突い）、博打をうて（笑い）、俺みたく夕方になったら
hatarak koyi lōken hari gahaganin.....

どこでもいいから3・4本酒を飲め.....

社会が内包する否定的側面を體現し、秩序創出に積極的に参与する道化の役割を、ここでも見てとることができる⁵⁷⁾。クヌハルパ (kunuharupa 性的表現による悪態) を含んだ悪態、排泄に関する言動の多用にも、ソカリ芝居の挑発的性格が見られる。

Vedamahatteya : ē lipē tiyena ekat pella dānava. Paccamira pattukara-
nna balanna ikmanṭa.

ウエダマハッテヤ : そのカマドにあるやつもほうり込め。パッチャミーラ
火をつけてみる、早く。

<パッチャミーラ、カマドに小便をする>

Vedamahatteya : hē paraya ! molē nātikama paraya. tō monava karan-
ava da ? uyana lipa kakkusiyak kiyala hitāgena paraya tō. Guruhāmi
balanna.

ウエダマハッテヤ : この野郎 ! (笑い) 間抜けなやつめ。お前は何をしようってんだ ? 炊事するカマドを便所だと思ってやがる、この野郎。グルハーミやってみる。

パッチャミーラとグルハーミは、誤解を生み、ヘマをし、横柄な態度をとる、ウエダマハッテヤからさんざん罵倒される。会衆は彼らに嘲笑を浴びせかける。頑迷な性格は次々とトラブルを引起して行く。彼らはシンハラ社会にとけ込めないはみ出し者である。彼らは共同体のけがれを一身に引受けるスケープ・ゴートにほかならない。ヤカーのように現われたグルハーミとパッチャミーラは、ついにはヤカーとして会衆＝共同体によって嘲笑＝追放される。嘲笑は、悪霊祓いのテーマを実現する方法である。

ところが、ウエダマハッテヤの場合はこれとは異なる。せむしで、好色で、ヤブ医者で、悪態をわめきちらすが、なぜか憎めず笑えましい。会衆からは共感をもって迎えられる。これは次章で見るように、ウエダマハッテヤが豊

穰性に深くかかわるためと考えられる。男女両性、老若の特徴を合わせもち、上の2人に較べてより多義的存在である。

芝居では病氣治療の場面が2つあり、興味深い。グルハーミが犬に噛まれた時と、パッチャミーラの大麻の吸いすぎの場面である。いずれも「死んだ」と表現されるが、グルハーミはウェダマハッテヤの治療で、パッチャミーラはソカリ・アンマのちからで回復する。最大のけがれ、死が回避されたのである。

デーワ・ダーネでは、プージャーのために清浄な乳の木前にバナナの幹で飾ったトロナが作られる。子供が間違えてアル・ケセル（料理用バナナ）の幹を持って来たが、不浄だとして直ちに捨てられた。マンゴーの枝が用いられたカパは「柱」や「棒」の意であるが、儀礼に用いられる場合は中心を象徴する聖柱である。これは神々の王インドラ神の象徴でもある⁵⁸⁾。カパには共同体の願望が託される⁵⁹⁾。

供物には、パニ・パトゥ（甘いごはん）から聖煙まで、清浄なものが捧げられる。こうした清浄なものの多用は神の意に適うだけでなく、それ自体けがれを祓うちからであり、同時にけがれがここにあることの表現である。人人は、神に捧げた供物を食べるにより、けがれや悪霊を寄せつけぬちからを得る。しかし、実際に神棚に供えた供物を食べるのは踊り手たちであり、会衆は神棚に供えた残りをもらうのである。最も効験ある食物を得るのは、危険な役目を担ってきた踊り手たちの権利である。

祈りでは、あらゆる災厄を祓うための言葉がくり返し唱えられる。

……mē ladaru prāna kārayiṅṭa

……この幼い生きとし者に

vāḍa pāmīni dukgīni jālāval, isē rudāval, devrē rudāval, lāmādē rudāval,

おとずれる 苦痛・けがれ、頭痛、 肩痛、 胸痛、

baḍē rudāval, nekgīni jālāval, kemmul gāyaval, hori kuṣiṭa, dada kuṣiṭa,

腹痛、 様々な苦痛、 おたふくカゼ、 できもの、 しっしん、

mal parangi, pāpol, vasūriya, sarābugāya, netgīni jālāval durinma

duruka いちご腫、水疱瘡、天然痘、はしか、眼病を ことごとく祓い

ravā……yakṣa baya yakṣa avatāra, prēta baya prēta avatāra,

dēva 浄め 夜叉の恐怖 夜叉の幽霊、死霊の恐怖 死霊の幽霊、

神の kōpa dēva udahas tibunat durinma durukaravā dilā……

怒り 神罰 ありとて ことごとく祓い浄め給い……

さらに邪視、邪言、妖術の害を祓うべく祈り、滝や渡し場、盗人、敵などの危険からの加護を願う。

VI. 豊穰祈願としてのソカリ

村人の言う「ソカリを踊ると雨が降る」は、ソカリの豊穰儀礼的性格を集約的に表現している。雨は大地の恵み一稲と焼畑の作物、家畜の成育の源泉である。マハ季にまとまった雨が待望されるのは、人々の生活がこの時期の収穫にかかっているからである。実りが豊かであれば十分な食糧が確保できる。余剰は換金し、子供たちの衣服、家屋の建増、より盛大な正月、巡礼旅行などに費すことができる。

村人にとって乾季は、暑さをもたらし、それは不浄で病気にかかりやすい状態である。実際、乾季には沢の水が減り、人間だけでなく家畜にも伝染病がはやりやすいという。これに対し、雨がもたらす湿り気と冷たさは、清浄と健康の表徴である。危機が回避され、安全と繁栄が得られると考えられている。

パッティニ神話の原典の1つ『シラパディハーラム』(Silapadihāram)では、マドゥライの都に火を放ったカンナヒ(Kannahi)の怒りが鎮まった後に、初めて天の王が地上に雨を降らせる。ソカリ芝居では雨に言及する場面はないが、芝居自体パッティニ神を慰撫し怒りを鎮めるために奉納されるとみることができる。カブラーラに憑依した神は常に、供物献納の不履行を咎める怒れる神である。女神の怒りの鎮静が降雨の前提である。14回のソカリ芝居は、マドゥライの女神がカンナヒの天への招来を予告し、天の王が彼女の神格化を宣言し雨を降らせるまでの14日間にちなんであると考えられる⁶⁰⁾。デーワ・ダーネでは祈りのなかに、雨雲神(Vāhimēgha)、風雲神(Sulanmēgha)の名が登場する。

パッティニ女神は、下生して人間界で7回生まれ変わったことにちなんて7パッティニと表現される。しかし、生因について必ずしも7様言及されるとは限らないし、種類も様々である。ガラウダの一座は、芝居のなかで次のようにうたっている。

āmben upannayi Aimba Pattini yō

āmba harāmbak atalāgena vāḍi yō

naralova rōḍuk balanḍa vāḍi yō

naralova raka den Aimba Pattini yō

マンゴーから生まれたアンパ・パッティニよ
 マンゴーの足輪を携えお出になった
 人間界の病苦を御覧にお出になった
 人間界を護り給えアンパ・パッティニよ

以下、花、火、ウコン、水と続く。デーウ・ダーネでも同様の詩がうたわれ、これにさらに肩 (ura) が加えられた。いずれも7に満たない。この場合7パッティニという呼称は、ここかしこに出現しうるパッティニ女神のちからの表現とみることができよう。7パッティニという言葉自体、豊穰性を表わしている。この聖数7は他にも様々な形で登場する。船の材料にする良木は7回目に得られる。7層の床をもつ船で海を航海する。7回目にして関所を通過する。またソカリを演じる回数も7回×2である。

豊穰性の象徴は、パーラウィーマの乳の木にすでにみられる。ミルクは吉兆、清浄とともに豊穰の象徴でもある。シンハラ社会の儀礼には、牛の乳 (ela kiri) あるいはココナツ・ミルク (pol kiri) が用いられる。新年や新築祝の際には、カマドにかけた器でミルクを沸騰させふきこぼす儀礼 (kiri itiravima) を行なって吉凶を占う。新年、月始め、開店、成女式などには、ミルク・ライス (kiri bat) をつくって食する。また菩提樹に対するプージャーでは、幹にふりかけて祈願する。パーラウィーマの乳の木も、こうしたミルクのシンボリズムに関連している。

芝居では最初にテーマが明示され、それを実現するうえで直面する問題・課題が、試練・困難を経て解決されていく。Bでは船、Cでは土地とマダマ、Dでは食が、Eでは赤ん坊が得られる。豊穰祈願にふさわしい筋書きである。

Bの(2)では、仕事を探している大工と弟子に偽電報が届けられる。出稼せぎに出た身内に親族がたかっているように仕組んである。これには、衣類や食糧品など、村内で生産できない品物に対する人々の願望が表われている。

Cでウェダマハッチャがとび出して来ると、会衆は喜々として迎える。長い鬚の仮面、せむし、大きな腹と腰、杖と手下げ袋を持って激しく踊る。ソッターナが手拍子を取り、子供たちははやし立て、演舞場は一気に盛上がる。その姿は見るからに豊穰性に充ちている。大きな腹と豊かな腰は、ラーガワンも指摘するように、妊娠している女性の象徴である⁶¹⁾。これは、時代と文化を超えて広く見られる道化の特徴の1つでもある。老齢にもかかわらず踊りまくるその肉体に、「老いてもサルは地を行かず」という言葉に、生気がみなぎっている。手下げ袋もすごい。あらゆる種類の薬、家族・親族一同、

牛、土地、動物までも入っているという。彼は土地の神と言うことができよう。

ウェダマハッチャはまた大変な好色漢である。パッチャミーラやグルハーミが土地をもらいに来ると追返してしまうが、ソカリ・アンマが来ると態度一変、お茶など用意し、手を握ったりする。好色も豊穰性に関連する。ウェダマハッチャは会衆にとって歓迎すべき相手である。会衆は共感の笑いをもって彼と親交を結ぶ。靱を得た後、パッチャミーラの腹に臼をのせてソカリ・アンマがつく。

Sokari kotannē kāgē viyak	dō
nekaṭi tiyennē mērol galak	dō
nopipi tiyennē mānel malak	dō
Guruva nennē kāgē basak	dō

ソカリがつくのは誰の靱か
 つけずにあるのは石ころか
 咲かずにあるのは水蓮の花か
 グルワが来ないのは誰の言葉にか

グナティラカは、靱をつく動作について、「これらの描写は、女の不妊と同時に欲求、大に対するあからさまな態度を示している」と述べている⁶²⁾。臼と杵を性交など豊穰性の象徴とする例は、スリランカ以外でも日本を始めとしてめずらしくない。

牛の隊商で行商して歩く商人も、豊穰性を携えて来訪する。グルハーミとパッチャミーラは、カツオブシ、米、香辛料、アラック、ビーディ・タバコなど、購入する品物をタミル語で列挙する。

グルハーミの治療に呼ばれたウェダマハッチャは、とうとう呪力でソカリ・アンマを連れ去ってしまう。カタラガマ神のちからでソカリ・アンマを探し出した後で、むしろを織る。むしろを織ることは、友情や和解の象徴的表現である⁶³⁾。ここではソカリ・アンマとグルハーミの間だけでなく、和解はウェダマハッチャなど他の登場人物すべてを含んでいるとみることができる。

次に料理と共食がある。男女の間で「いっしょに食べる」という表現は、シンハラ民俗社会において結婚あるいは性的関係を意味している。ここではソカリ・アンマを囲んで、グルハーミ、パッチャミーラ、ウェダマハッチャ、ソッターナが共食する。パッチャミーラは卑しいクラヤの出身で、しかも金で雇われた下男である。今日でも高地シンハラ社会では、特定の儀礼⁶⁴⁾の場

合を除いては、異なるクラヤの者とは共食しないのが原則である。この場合、クラヤの違いや身分の差は解消され、みな同等の地位にいることを示している。この共食は、これまでのソカリ・アンマをめぐる異性関係をまとめて提示したとみることができる。

こうした豊かな性が、ソカリ・アンマの妊娠と出産に結実する。豊かな性は、性的表現による悪態クヌハルバの使用にも認められる。ここでも、女性の豊穰性と大地の豊穰性との間に象徴的関係をみることができる。女性の多産性が農作物の豊作に結びつくという考え方は、文化を超えて広くみられる⁶⁵⁾。豊かな性は妊娠をもたらし、大地の豊穰を実現するちからである。ソカリ・アンマの出産は、大地の恵みの象徴とみなすことができる。

踊り手たちが赤ん坊を抱えて贈物を乞いながら会衆の間を回る時、豊穰性は頂点に達する。

māmagē okkaṭa enḍa aṇḍa	navā
māmava dākālā hinaha vāṭe	navā
atē tiyena orlōsuva illa	navā
nil kola denava ē loku	māmā

オジさんの膝に来るんだと泣いている

オジさんを見て笑っている

腕にある時計をほしがっている

10ルピー紙幣をくれるだろ、その大オジさん

āyi akkē hānge	nnē
karē māle dāpa	nnē
āyi akkē hānge	nnē
kaṇaṭa tōḍu dīpa	nnē

どうして姉さん隠れるの

首に首飾りをかける

どうして姉さん隠れるの

耳に耳飾りをつける

onna putā poḍi	māmā
lōba nāllu ē	māmā
lōba nātiva oya	māmā

oya māmāṭa harak ā	tī
dhana sampat rās kara	tī
gon siyayak tāgi de	tī

そうら坊や小オジさん

ケチじゃないときそのオジさん

ケチらないでそのオジさん

そのオジさんには牛がいる

いろんな財産持っている

雄牛100頭くれるだろ

赤ん坊の笑みや泣き声から、会衆は誰も逃れられない。自分のことがどのようになられるか、何を要求されるかと、みな気がかりである。気前の良さが強調され、ケチくさい態度は好ましくない。金銭だけではない、腕時計や指輪なども要求されたなら差出さなければならない。赤ん坊の回りを金銀で充たすのである。赤ん坊の誕生は、民衆の願望の集約的表現とみることができる。象徴的にはあれ、願望の実現は、欲求不満というけがれ (duka) を祓うことである。

デーワ・ダーネでもミルクのシンボリズムがみられる。プージャーは乳の木前で行ない、パニ・パトッはココナツ・ミルクを注いでたき、カパには乳の木としてのマンゴーの枝が用いられた。神々に対する供物は、人間に恵みをもたらすべく義務を負わせるためである。そして何よりも、そうした豊かな供物自体が豊穰性を表わす。踊り手たちは、より盛大なデーワ・ダーネができるよう努力する。豊かな供物は神を喜ばせ、雨がもたらされよう。

こうしてソカリは、災厄が祓われ豊穰性が実現されるべく構成されている。ソカリの期間一乾季で最も不浄で不毛で危険な時期に、ソカリ・アンマとその一行は毎夜、村人に恵みをもたらすべく練り歩くのである。

むすび

ソカリのテーマ、悪霊祓いと豊穰祈願を実現するには、パッティニ女神の確かな存在が必要である。ソカリにおいて用いられた手法は、パロディである。すなわち、パッティニの貞淑で献身的な妻、処女、産まず女というイメージに対して、ソカリ・アンマは多くの男性と関係し、駆落し、出産する。こうした手法は逆に、パッティニ女神の厳格なイメージを浮彫にさせる。笑いは女神を慰撫し、会衆を楽しませる方法でもある。

ソカリ芝居では、シンハラ兄＝会衆を除いて登場人物はみな異人である。会衆は、演舞場＝世界に異人の出現を見るのである。世界自体、パッチャミーラが創ったのだった。

ソカリの異人たちは境界を創出し、中心と周辺の関係、すなわち秩序を創る。グルハーミとパッチャミーラは、タミル語やタミル語訛のシンハラ語を話し、シンハラ社会の慣習に無知である。こうした異邦人の出現は、シンハラ的なものと非シンハラ的なもの、スリランカと外国、すなわち内と外の区別を明確化する。シンハラ兄＝会衆に対するグルハーミの挑発（シンハラ人のバカ呼ばわり）は、シンハラ人とタミル人（外国人）の違いを決定的にする。コーッテの大工の登場は、高地と低地の区分を提示し、会衆は高地人としてのアイデンティティを獲得する。汚物そのものともいふべきグルハーミの出現や、排泄に関する表現の多用は、浄・不浄の観念を強固にする。ウェダマハッタヤの唱える呪文の非道徳的・反社会的内容は、逆に社会規範を浮彫にする。

グルハーミとパッチャミーラは、シンハラ社会の秩序を壊乱し続ける。彼らは、反シンハラ的、反秩序的なものを体現する。彼らはシンハラ社会のスケープ・ゴートとして、ウェダマハッタヤに罵られ、会衆に笑殺される。他方ソカリ・アンマは、来訪するカリスマである。行く先々で困難を克服する。彼女は、土地の神ウェダマハッタヤと結ばれる。むしろを織って一同和合する。共食によって、ソカリ・アンマ（中心）のもとに異人たち（周辺）が統合される。秩序が創出されたのである。その結果は赤子という豊穰である。シンハラ社会に安全と繁栄がもたらされたとたん、ソカリ・アンマの役目は終わった。地上での長居は無用、再び天へ戻って行く。こうしてソカリの異人たちは、ソカリの主要なテーマー悪霊祓いと豊穰祈願一の実現に深くかかわっていることがわかる。

会衆はソカリを通してコミュニタス⁶⁶⁾を経験する。芝居を観ながら共に笑い、デーワ・ダーネで共食するなかで、平等性や仲間意識が再形成される。それはマハ期の労働へ向けての活力となろう⁶⁷⁾。

〔付記 ソカリに関しては、芝居における建国神話ウィジャヤ王子来訪譚の織込みや笑いの問題など、考察すべき問題がまだ残されている。また低地のパッチャミーラに關するオペーサーカラの研究との比較も、今後の課題としたい。〕

注

- 1) Obeyesekere, G., "The Great Tradition and the Little in the Perspective of Sinhalese Buddhism," *The Journal of Asian Studies*, 21, 1963.
Obeyesekere, G., "The Buddhist Pantheon in Ceylon and its Extensions," in M. Nash ed., *Anthropological Studies in Theravada Buddhism*, Yale University Southeast Asia Studies, 1966.
- 2) Seneviratne, H. L., *Rituals of the Kandyan State*, Cambridge University Press, 1978.
- 3) Wirz, P., *Exorcism and the Art of Healing in Ceylon*, Leyden: E. J. Brill, 1954.
Yalman, N., "The Structure of Sinhalese Healing Rituals," in *Religion in South Asia*, E. B. Harper ed., University of Washington Press, 1964.
Obeyesekere, G., "The Ritual Drama of the Sanni Demons: Collective Representations of Disease in Ceylon," *Comparative Studies in Society and History*, vol. 11, No. 2 1969.
- 4) Kapferer, B., "Entertaining Demons: Comedy, Interaction and Meaning in a Sinhalese Healing Ritual," *Modern Ceylon Studies*, 1975.
Kapferer, B., "First Class to Maradana: Secular Drama in Sinhalese Healing Rites," in S. F. Moore and B. Myerhoff ed., *Secular Ritual*, Assen: Van Gorcum, 1977.
Kapferer, B., *A Celebration of Demons*, Indiana University Press, 1983.
- 5) Obeyesekere, G., *The Cult of the Goddess Pattini*, University of Chicago Press, 1984.
- 6) Sarachchandra, E., *The Folk Drama of Ceylon* (Second Ed.), Colombo: Department of Cultural Affairs, 1966.
- 7) Raghavan, M. D., "The Kinnaraya," *Spolia Zeylanica*, vol. 26 Part II, 1951. *Sinhala Nätum*, Colombo 1967 Chap VIII.
- 8) Goonatilaka, M. H., *Sokari of Sri Lanka*, Colombo: Department of Cultural Affairs, 1976.
- 9) Disānāyaka, J. B., "Sokari Nāḍagama," *Rasavāhini*, Aug. 1980.
- 10) 一般的には異人の概念は、ジノメルに従って境界人（たとえば、商人、移住者など）として扱われる。ここではそれに周辺人（たとえば匪族や呪術師、道化

- 狂人)も加える。G. ジンメル, 居安正訳『秘密の社会学』世界思想社, 1979年。
- 11) 仏陀は宇宙の支配者 (chakravartin) と呼ばれている。
 - 12) Pattini という言葉自体, タミル語で貞淑で献身的な妻の意である。
 - 13) Obeyesekere, 1984, op. cit., Chap. 13.
 - 14) Ibid., p. 227.
Manjusri, L. T. P., "The Goddess Pattini" *Ceylon Today*, 5(8), 1956, pp. 25~26.
 - 15) Obeyesekere, G., "The Goddess Pattini and the Lord Buddha," *Social Compass*, XX 1973/2, p. 219. Obeyesekere, 1984 op. cit., pp. 226, 236.
 - 16) Somapala, B. K., "The Pattini Cult in Ceylon," *Community*, 3(1), Apr. 1958 p. 53.
 - 17) 儀礼および薬用に用いられる植物, 英語名 morgossa.
 - 18) ここでは儀礼職能者(執行者)と彼らが主として仲介する超自然的存在との関係を基準にして分類した。実際には儀礼職能者に代わって, 心得のある者によって代行されることが少なくない。特に①~⑥の儀礼についてはよく見られる。なおウエダラーラは, 村人の間ではウエダマハッチャと通称されている。
 - 19) 中村元『仏教語大辞典』東京書籍, 1980年 1296ページ。
 - 20) インドから来訪したとされている神で, スリランカ東南部に神殿が建立されている。シヴァ神の息子で像神がネンチャとは兄弟である。
 - 21) 水に白檀 (hañḍun) の枝の汁, ウコンとライム (dehi) の汁, ココナツ・ミルク (pol kiri) を加えたもの。
 - 22) perahāra は「行列」の意。最大規模で行なわれるキャンディ・ペラヘラでは, 仏齒=仏陀, 四守護神, 悪霊, 旧キャンディ王国の官僚が都を巡る。pinkama は「功德を積む行為」の意であるが, 今日では寺院の祭りをさす。両者とも主として, 悪霊祓い(病氣予防・治療)と豊穰祈願(雨乞い)のためである。
 - 23) シンハラ人の中では, 病氣は自然的原因および超自然的原因によって生じると考えられてきた。自然的原因に対しては, インド伝来の医術アーユルヴェーダ (āyurvēda) を学んだ医師ウエダラーラが薬を用いて治療する。それでも治らない時は, 原因は神々, 星神, 悪霊, 死霊であるとみなされる。神々に対してはカブラーラ, 悪霊・死霊に対しては呪医カッターディヤ, 星神に対してはバリ・アドラーラが儀礼を行なう(表1参照)。なお村レベルでは, ウエダラーラ, カブラーラ, カッターディヤの概念や役割はある程度重なっており, 必ずしも明確に区分されていない。
 - 24) シンハラ社会の正月は, グレゴリー暦では4月13~14日にあたる。ウエサックは, 仏陀の生誕・成道・涅槃を祝すとともに, 仏陀3回目の来島, シンハラ王国の建国者ウイジャヤ王子 (Vijaya) のランカー島上陸を記念する祭りである。5月の満月の日に行なわれる。ポソンは, スリランカへの仏教伝来を記念する(6月の満月の日)。ポソン祭をもって, 正月以来新しい時間のもとで創られてきた象徴世界が基本的にできあがる。
 - 25) Disānāyaka, op. cit.

- 26) vasama は, グラーマ・セーワカ (Grāma Sēyaka) と呼ばれる行政官1人が管轄する行政単位で, 4~6の自然村を含む。
- 27) 便宜的に本稿でも宗教に結びつけた民族分類に従うが, スリランカに住む人々は, 民族を超えてあるレベルで互いに象徴世界を共有していることも留意しておきたい。たとえば2大聖地スリー・パード (Sri Pāda, 仏尾山) とカタラガマは, あらゆる「宗教」に属する人々の信仰の対象になっている。
- 28) シンハラ語で kiṭṭal と呼ばれる。つぼみの時に花序を切って液を採取し, 酒 (rā), 蜜 (kiṭṭal pāni), 粗糖 (hakul) をつくる。
- 29) 新月, 半月, 満月の日には, 寺院で8戒の実践などの儀礼が行なわれる。
- 30) 月収300ルピー (約4,500円) 以下の世帯に対して政府が支給する。切符は協同組合の店で食糧品と交換できる。
- 31) dōti は北インドの男性の伝統的の衣服。
- 32) 3本線は, ヴィシュヌ, シヴァ, ブラーフマの3神を表わしている。
- 33) 仏教儀礼や神々の儀礼の際に打つ吉兆の拍子。
- 34) 近年のカタラガマ信仰の流行を反映してか, この一座は常にカタラガマ神の絵像を置いていた。
- 35) Dilli はデリー, Kāsi はワラーナプーリ付近にあったといわれる国。Bengāle はベンガル。
- 36) コロンボ近郊。コーッテ王国 (1371~1597年) の都があった。
- 37) ココナツやパルミラ・ヤシの花序の汁, あるいはサトウキビからつくる蒸溜酒。
- 38) 多くの聖仙が住むインド北部の山。仏陀もそこに住み, 瞑想し説教を行なったという。
- 39) millala はパドッラ方言。他地方では milla と呼ばれる。高木で丈夫なため, 建築材, 特に柱に用いられる。
- 40) maḍama または maṇḍama。今日ではアンバラマ (ambalama) と呼ばれることが多い。両者とも語源はタミル語の maḍam, ambalam。巡礼, 行商, 使者などが利用した休憩・宿泊所, 村人の寄合所。
- 41) シンハラ語のことわざ。
- 42) インドにあるという都。
- 43) 母親の指輪の金をけずって乳にとかしたもの。赤ん坊が丈夫に美しく育つようにとの願いがこめられている。
- 44) 英語名 green gram.
- 45) 英語名 guava.
- 46) 「門」を意味する torana は, アーチ状の飾りのある神棚や, ジャータカ物語を描いたウエサック祭の飾りに対しても言われる。
- 47) kapa は, あらゆる願いごとがかんう宇宙の聖木 kalpavrukṣaya に由来する。
- 48) ヘネップ, V., 綾部恒雄・裕子訳『通過儀礼』弘文堂, 1977年 第3章。
- 49) 折口信夫「能楽における『わき』の意義」『折口信夫全集』第3巻所収 中央公論社 1966年, 231~249ページ。
なお, 折口の能研究については藤本茂樹氏から助言を得た。

- 50) リーチ, E. R. 青木保・宮坂敬造訳『文化とコミュニケーション』紀伊国屋書店 1981年, 55~60ページ。
- 51) 同書, 58ページ。
- 52) ソカリ芝居の構成については, すでに拙稿「スリランカの儀礼劇と社会変動—ソカリと民族暴動—」『アジア経済』vol. 26, No. 1, 1985年で要約的に紹介した。
- 53) 「けがれ」には, ここでは「よごれ・きたないもの」(kili, jalāva) と「苦」(duka) を含めている。duka は人生において不可避な死, 病気, 満たされぬ欲求, 憎悪などを意味し, 精神的・肉体的に無秩序な状態である。儀礼では, duk gini jalāval と一括して表現されることが多い。
- 54) 神の前では人間を, 「子供」(daruvo), 「みどり児」(ladaruvo) と表現する。
- 55) Sarachchandra, op. cit. Raghavan, 1951., 1967, op. cit. Goonatilleka, op. cit.
- 56) グルハーミはこのほか, 「マドゥラップラ (マドゥライ) から来た」と表現される。ここでは出身地の地理的位置はさほど問題ではなく, グルハーミとパッチャミーラは, タミル語とタミル語訛のシンハラ語の使用により異人一般を演じている。
- 57) 山口昌男『道化の民俗学』新潮社, 1975年。同『道化的世界』筑摩書房, 1975年。
- 58) Godakumbura, C. E., "Sinhalese Festival—Their Symbolism, Origins and Proceedings," *Journal of the Royal Asiatic Society (Ceylon Branch)*, n. s. vol. XV. Colombo, 1970, p. 112.
- 59) 筆者が1982年に調査したタンネーパングワ (Tēnnēpanguva) 地区 (ガラウダ地区の北東約4マイル) では, ルクアッタナ (rukattana) の枝をカバとした。それに会衆が硬貨を布切れで結んで病気予防などの願いごとをしたあと, 川に流される。
- 60) Dikshitar, V. R., *The Silappadikaram*, Oxford University Press, 1939, pp. 262~269. Daniélou, A., *Shilappadikaram*, New York, 1965, pp. 137~143.
- 61) Raghavan, 1951., op. cit., p. 248.
- 62) Goonatilleka, op. cit., pp. 17~18.
なお詩の3行目の mērol を「メール山」(Mēru) ととることもできる。メール山は須弥山, 仏教的宇宙の中心にそびえる山である。
- 63) Sarachchandra, op. cit., p. 93. Goonatilleka, op. cit., pp. 16~17.
- 64) デーワ・ダーネヤ, 仏教寺院での8戒・10戒実践者のダーネ。
- 65) エリアーデ, M. 久米博訳『豊饒と再生』エリアーデ著作集第二巻, せりか書房, 1974年 134~174ページ。
- 66) ターナー, V. W., 富倉光雄訳『儀礼の過程』思索社 1976年, 第3章・第4章。
- 67) 本稿は1983年度に提出した博士予備論文「ソカリースリランカ高地のパッチェニ信仰と社会変動—」の一部を修正したものである。御指導いただいた友杉孝教

授と小西正捷教授に感謝の意を表したい。なおソカリをめぐる儀礼のシンボリズムと民族暴動との関連については, 拙稿前掲論文において考察した。社会的危機の高まりのなかでは, 悪霊祓いの方法としての嘲笑・笑殺が, 現実社会における悪霊祓い=敵としてのタミル人殲滅の課題に結びついた。

(立教大学文学研究科地理学専攻博士課程後期課程)